

書き言葉における日本語学習者の文体の使用状況
- 『YNU 書き言葉コーパス』を用いて -

Written Language style of Japanese Language Students
- Use of YNU Written Language Corpus -

金 蘭美 金庭 久美子

キーワード：書き言葉、文体、YNU 書き言葉コーパス、タスク、読み手

外国語キーワード：written language, style, YNU corpus, task, readers

要旨

本研究は『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』(YNU 書き言葉コーパス)における 1080 編 (12 タスク×90 名日本語母語話者・学習者 (韓国語・中国語母語話者各 30 名) の作文を対象とし、書き言葉における文体を調べた。タスク別の使用状況を調べた結果、読み手が明確なタスクの場合は日本語母語話者、学習者ともに「デスマス体」を使用し、両者の間にあまり差がみられなかった。しかし、日本語母語話者の間でもどの文体を選択するか決まっていないタスクや同じタスク内で「デスマス体」と「非デスマス体」の混用が見られるタスクの場合は学習者の文体に不自然な点が見られた。母語別の使用状況を見た結果では、中国語母語話者の方が不自然な文体を多く使用し、レベル別の使用状況を見た結果では、韓国語、中国語母語話者両学習者において日本語能力が低いほど不自然なものが多かった。以上の結果から、今後はさまざまな読み手を対象としたタスクで、メールやレポートなどの媒体にも留意させた作文教育が必要である。

英文要旨

This paper is about our research on the style choices of the YNU written language corpus. Through our research on the 12 writing tasks, we found that when writing to a specific reader, the writers used DESUMASU-TAI, and there were not any significant differences between native Japanese speakers and Japanese learners. However, in the case of tasks in which the writer could choose whether to use DESUMASU-TAI, HI-DESUMASU-TAI, or a mixture of the two, some unnatural style choices were made by Japanese learners. Native Chinese speakers made more style mistakes than native Korean speakers, and the lower the Japanese skill level, the more mistakes were made. These results suggest a need to teach students the importance of the relationship with the reader and the writing medium when choosing between politeness forms.

1. はじめに

日本語学習者が初めて接する文体はおそらく「デスマス体」であろう。「デスマス体」を使い丁寧な言い方をすれば相手に不快な思いをさせずにコミュニケーションができる上に、「マス形」の活用が「非デスマス体」の活用に比べ学習者にとって負担が少ないためだと考えられる。しかし、日本人との実際のコミュニケーションでは「デスマス体」以上に「非デスマス体（ダ・デアル体／普通体）」が使われる場合も多く、日本語教師との教室内での会話では問題にならなかった「デスマス体」による会話が日本人の友人との会話になると不自然に聞こえてしまうことがある。このように話し言葉におけるいわゆるスピーチレベルというのは相手との関係や場面に合わせ、調整をすることが求められるが、これは書き言葉でも同様であると言える。そこで、本研究ではタスク別作文コーパスにおける日本語母語話者及び日本語学習者の文体の使用状況を調べ、今後の作文教育において文体の指導のためにどのようなことが必要なのかを探ることとする。

2. 先行研究の問題点と本研究の目的

2-1 話し言葉における文体に関する研究

従来の文体の使用に関する研究では、話し言葉では「スピーチレベルシフト」という観点から会話分析を通して、いつ、どのような目的でスピーチレベルシフトが行われるか、について焦点が当てられてきた（宇佐美 1995、三牧 2007、寺尾 2010 など）。研究対象は、母語話者同士のみならず、学習者同士、接触場面など、さまざまな場面や聞き手を考慮した研究がなされている。

これらの研究では、日本語で円滑なコミュニケーションを行うために、学習者に場面や話し相手に合わせ、スピーチレベルを適切に調整することを、学習者の段階に合わせて教える必要があることを指摘している。

話し言葉における研究の場合、上下関係や親疎関係、また、日本語母語話者同士なのかそれとも日本語母語話者と学習者による接触場面なのか、など話し相手の属性が考慮されている。さらに、雑談のような軽い話題や、依頼のように学習者に負担をかけるような場面など、スピーチレベルシフトが起こる要因について様々な観点から分析が行われている。

2-2 書き言葉における文体に関する研究

書き言葉における文体の研究には野田（1998）をはじめとする一連の研究が見られる（熊谷 2001、中村 2009、2011、2012 など）。論文、小説、新聞の投書、エッセイなどの書き言

葉のデータを用いて「デスマス体」と「ダ・デアル体」の文体の使い分け、それらの混用については、混用の出現位置、機能などについて研究が行われている。しかし、話し言葉の場合とは異なり、書き言葉の場合は、読み手や場面を考慮した分析はなされておらず、学習者の書き言葉の使用の全容はまだ明らかにされていない。

2-3 従来の研究の問題点

従来の書き言葉を対象とした文体の研究における問題点としては、まず読み手が「特定」なのか「不特定」なのか、上下関係や親疎関係など、読み手との関係が考慮されていないということが挙げられる。書きことばの文体の研究に使用されているデータは主に読み手が不特定多数のものである。しかし、話し言葉の研究でも明らかにされているように話し手によってスピーチレベルを調整する必要があるのと同様に、書き言葉でも読み手を考え、文体を調整することが必要であると思われる。

また、書き言葉にも PC メール、手紙、雑誌記事、レポートなど、さまざまな伝達媒体があるためそれらも視野に入れ、さらに、どの伝達媒体を用いて伝えるのかについても研究の際に考慮する必要があると考えられる。

従来の研究のもう一つの問題点は、母語話者と学習者の使用実態を比較するための十分なデータがないという点である。話し言葉のスピーチレベルシフトの研究には日本語学習者を対象としたものが見られるが、書き言葉の場合は学習者の文体の使用状況はまだ明らかにされていない。中道（1989）では文体について、日本語の場合は、「文章を通して一定の文体が維持されることは非常に強い要求で」ある、また、「文法的・意味的な正しさよりも文体的なふさわしさが優先されることさえある」としており、特に、敬語については「話し手・聞き手・場面・話題」に応じて文体を選択することができなければならないと述べている。しかしながら、レポートやエッセイなどの書き言葉を対象としているため、メールや雑誌記事などによる書き言葉の場合はどのような文体が基調となるのかが明らかにされておらず、学習者の文体の使用状況はまだよくわかっていない。

2-4 本研究の目的

このような先行研究の指摘や問題点を踏まえ、本研究では文体の使用状況を調べるための資料として、金澤裕之編（2014）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』（以下 YNU 書き言葉コーパス）¹に収められている学習者と日本語母語話者の書き言葉データを用いることにする。

本研究では「YNU 書き言葉コーパス」を用いて、まず各タスクにおける日本語母語話者

¹ 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』は通称 YNU 書き言葉コーパスとされており、YNU とは横浜国立大学、Yokohama National University の略である。

の文体を調べ、基調となる文体を設定する。次に学習者の文体の使用状況を調べ、母語話者と学習者の間、また、学習者同士において基調文体の設定に差が見られるかどうかを確認する。さらに、学習者の母語別、日本語レベル別の文体の使用実態を明らかにする。最後に、これらの結果を踏まえ今後の作文教育、特に文体の指導に必要なことは何かについて考えてみたい。

3. 調査

3-1 使用コーパスの概要

本稿で使用したコーパスは「YNU 書き言葉コーパス」に収録されている、12種類のタスク×90名分=1080編である。このコーパスには日本語・韓国語・中国語母語話者各30名分が収録されており、学習者については一定の評価基準によりレベル分けされた上位群・中位群・下位群それぞれ韓国語と中国語の各10名ずつのデータが収められている。表1に「YNU 書き言葉コーパス」のタスクの詳細を示しておく。なお、各タスクの具体的な内容については最後の《参考資料》を参照されたい。

表1 YNU 書き言葉コーパスのタスク

「自発型」のタスク	読み手	「頼まれ型」のタスク	読み手
長さA(短) 《1》メールで面識のない先生に本を借りる 《2》メールで友人に本を借りる 《3》レポートでグラフを説明する	特定・疎 特定・親 不特定	長さA(短) 《7》メールで先生に観光スポット・名物を紹介する 《8》メールで先輩に起こった出来事を友人に教える 《9》広報誌で国の料理を紹介する	特定・疎 特定・親 不特定
長さB(長) 《4》メールで学長に奨学金増額の必要性を訴える 《5》手紙で入院中の後輩を励ます 《6》新聞の投書で市民病院の閉鎖について意見を述べる	特定・疎 特定・親 不特定	長さB(長) 《10》メールで先生に早期英語教育の意見を述べる 《11》メールで友人に早期英語教育の意見を述べる 《12》小学生新聞で七夕の物語を紹介する	特定・疎 特定・親 不特定

「YNU 書き言葉コーパス」は読み手、伝達媒体、長さなどが考慮されて作られており、一人の被験者が12種類のタスクを書いているという特徴がある。12のタスクでは、タスク内に読み手が誰なのかを示してあり、特定の場合は上下関係や親疎関係を配慮した読み手を、不特定の場合は不特定多数の読者を想定するように書かれている。タスク内容は「自発型」と「頼まれ型」があるが、「自発型」のタスクは書き手が必要に応じて自ら進んで書くであろうと思われるタスクであり、「頼まれ型」は返信メールなどのように誰かに頼まれ

たことに対して書かざるを得ない状況を想定したタスクとなっている。また、「伝達媒体」は、メール（PCメール、携帯メールなど）、手紙、レポート、新聞への投書、広報誌など、書き分けるように指示されている。さらに、文章の長さにより長さ A（やや短い：説明・描写など）と長さ B（やや長い：意見述べなど）に分かれる。たとえば、タスク《1》は、面識のない先生（特定・疎・目上）に図書を借りるという「自発型」のタスクであり、想定される文章の長さは「短」である。また、その内容を伝えるための媒体はメールである。

3-2. 調査結果

3-2-1 タスク別の文体の使用状況

本研究では一つのタスク内でより多く使用されている文体の種類を調べた。その際に語彙における文体には触れずに、節末と文末の文体において「デスマス体」なのか、「非デスマス体（普通体／ダ・デアル体）」なのかを見た²。

その結果、表 2（日本語母語話者）、表 3（学習者）のようになった。基調文体の設定については、母語話者 30 名のうち、同一の文体の使用率が 9 割以上の場合、本研究における基調文体とし、「デスマス体」と「非デスマス体」とに分けた。表 2 のタスク《1》の場合、30 名中、30 名が「デスマス体」を使用していることから、「デスマス体」を基調文体とした。一方、タスク《2》の場合、30 名中 27 名が「非デスマス体」を使用していることから「非デスマス体」を基調文体とした。

表 2 から日本語母語話者は、12 タスクのうち 9 つのタスクで基調文体が「デスマス体」、あるいは「非デスマス体」になっていることがわかる。「デスマス体」が基調文体となるのは、タスク《1》、《4》、《7》、《9》、《10》、《12》で、「非デスマス体」が基調文体となるのは、タスク《2》、《3》、《8》と、日本語母語話者同士ではこれらのタスクにおいては文体の使用に共通した認識や規範意識があることが窺える。タスク《5》、《6》、《11》は、9 割には満たないが、「非デスマス体」のほうがより多く選ばれている。

タスク《5》の場合は相手が目下の後輩ということもあり、7 割以上の人が「非デスマス体」を選んでいるが、「デスマス体」も 3 割の人が選んでいる。これは、手紙というタスクの性格上、「デスマス体」の使用が容易になった結果ではないかと考える。また、タスク《6》の投書の場合、「デスマス体」「非デスマス体」の両方の文体が使用可能なタスクであるが、「デスマス体」より「非デスマス体」のほうがより多く使われている。タスク《11》の場

² 節末の場合、「～が」「～し」「～けど」節（二重下線部）のような主節との文体にかかわる従属節を対象としている。次の例（a）は、節末（非デスマス体）と文末（デスマス体）の文体を混用している例である。

（a）図書館の検索システムで調べたところ、図書館にはないが、先生の研究室に一冊あると分かりました。（《1》本の貸し出し・目上／C006）

合は、友人へのメールなので「非デスマス体」が基調になると思われるが、意見を述べるタスクであるため、表現を和らげる工夫として「デスマス体」を使用しているようである。以上から、日本語母語話者にはこのコーパスで取り上げたほとんどのタスクにおいて基調文体の設定に共通認識のようなものがあると言える。

表2 母語話者のタスク別の基調文体

タスク	デスマス体	%	非デスマス体	%
《1》本/上 ³	30	100	0	0
《2》本/友	3	10.0	27	90.0
《3》レポート	1	3.3	29	96.7
《4》奨/上	30	100	0	0
《5》手紙/下	8	26.7	22	73.3
《6》投書	12	40.0	18	60.0
《7》観光/上	30	100	0	0
《8》携帯/友	0	0	30	100
《9》料理	27	90.0	3	10.0
《10》意見/上	30	100	0	0
《11》意見/友	4	13.3	26	86.7
《12》物語	29	96.7	1	3.3

表3 学習者のタスク別の基調文体

タスク	デスマス体	%	非デスマス体	%
《1》本/上	60	100	0	0
《2》本/友	17	28.3	43	71.7
《3》レポート	14	23.3	46	76.7
《4》奨/上	60	100	0	0
《5》手紙/下	25	41.7	35	58.3
《6》投書	46	76.7	14	23.3
《7》観光/上	60	100	0	0
《8》携帯/友	0	0	60	100
《9》料理	50	83.3	10	16.7
《10》意見/上	60	100	0	0
《11》意見/友	7	11.7	53	88.3
《12》物語	48	80.0	12	20.0

表3は、韓国語母語話者、中国語母語話者を合わせた60名分の文体の状況である。学習者の場合、一つのタスク内で「デスマス体」と「非デスマス」を混用しているケースが多かったが、より多く使用されている文体を基準に「デスマス体」と「非デスマス体」とに分けた。

表3を見ると、学習者は日本語母語話者の場合と異なり、半分以上のタスクで基調文体といえるものがなく、特に書き手との関係が同等か目下の読み手の場合に文体が揃っていなかった。しかし、読み手が特定・目上のタスクの場合は、日本語母語話者同様、学習者も共通した文体を使用していることがわかる。

次の表4は、表2と表3の割合をまとめたものである。表4を見ると、網掛け部分のタスク《2》、《3》、《5》、《6》、《12》においては両者に15%以上の差があることがわかる。このうち、タスク《5》、《6》、《12》は「デスマス体」、「非デスマス体」のどちらを選んでも良いタスクであるが、その中でも日本語母語話者はある程度の共通した認識を持っている

³ 読み手が特定の場合、上（特定・目上）、友（特定・同等）、下（特定・目下）と記した。不特定の場合は表記していない。

ため、タスク《5》とタスク《6》では「非デスマス体」を多く使用し、タスク《12》では「デスマス体」を基調文体として選んでいた。しかし、学習者の場合は、タスク《5》とタスク《6》では「デスマス体」を選んでいる割合が日本語母語話者に比べると高く、タスク《12》では「非デスマス体」の使用率が母語話者より高いことがわかる。さらに、タスク《3》のレポートのような「非デスマス体」で書くべきタスクにおいても学習者の場合「デスマス体」を選んでいる割合は 23.3%であった⁴。学習者の場合、タスク《6》を除き、文体の選択傾向は母語話者と同様であるが、数値に差があると言える。

表 4 母語話者と学習者に差が見られたタスク

タスク	デスマス体 (%)		非デスマス体 (%)	
	母語話者	学習者	母語話者	学習者
《1》 本/上	100	100	0	0
《2》 本/友	10.0	28.3	90.0	71.7
《3》 レポート	3.30	23.3	96.7	76.7
《4》 奨/上	100	100	0	0
《5》 手紙/下	26.70	41.7	73.3	58.3
《6》 投書	40.0	76.7	60.0	23.3
《7》 観光/上	100	100	0	0
《8》 携帯/友	0	0	100	100
《9》 料理	90.0	83.3	10.0	16.7
《10》 意見/上	100	100	0	0
《11》 意見/友	13.3	11.7	86.7	88.3
《12》 物語	96.7	80.0	3.3	20.0

基調文体の選択に差が見られるタスクの特徴としては、読み手が不特定、あるいは同等か目下の場合であるということが挙げられるが、太枠になっているタスク《8》とタスク《11》の場合は、読み手が特定・同等の相手のタスクであるにもかかわらず、《8》では全員が、《11》では8割以上の方が基調文体として「非デスマス体」を選んでいた。

以上をまとめると、まず、読み手が特定で目上のタスクの場合は、母語話者と学習者の間で基調文体が一致しているのに対して、読み手が同等または目下の場合や不特定の場合、学習者は母語話者とは異なる文体を選ぶ傾向があると言える。次の例 (1) (2) に日本語母

⁴ タスク《3》の場合、レポートのタスクであり、「非デスマス体」で第1文目が示されているため、「非デスマス」で書かなければならないタスクである。

話話者と学習者のタスク《2》における「デスマス体」と「非デスマス体」の混用の例を示す。()の中は、調査協力者の情報である⁵。なお、デスマス体には下線で記し、非デスマス体は二重下線で示しておく。

- (1) 頼みたいことがある。本を貸してほしいんだ。たしか、『環境学入門』を持ってきてきたんだけど、それ、レポートにどうしても必要なんだ。だから、もししばらく使わないようなら、僕に貸してくれないか？大学の OPAC 検索も試してみたんだけど、違う専攻の先生の研究室にしか置いてなくて。レポートが書き終わるまで、2週間くらい借りたいところなんだけど、無理なら無理で、そうでないなら何日くらいこっちが借りてても大丈夫か、教えてほしい。おねがいします。(《2》本の貸し出し・友人/J012)
- (2) 鈴木君 お疲れさまです。【C059】です。最近論文を書く時に必要な本があって、『環境学入門』という本ですが、図書館にはおいてないみたい。たしかにあなたはこの本持っているような覚えがありますが、もしそうでしたら、ちょっと貸してくれないか？頼む m(_ :)m。(《2》本の貸し出し・友人/中位群/C059)

3-2-2 レベル別に見た学習者の不自然な文体の使用

学習者の文体の使用に不自然なものがあるかどうかを上位群、中位群、下位群のレベル別に調べたところ、次の表5と表6のような結果となった。「不自然」というのは、日本語母語話者の基調文体とは異なるものや、例(3)のように、「デスマス体」の文体に、節末で「ダ体」の「～だが」を用い、全体の文体にマッチしていないもの、また、例(4)のように終助詞や「のだ」を付加すべきところにそれらに相当するものがないものなどである。

- (3) まだ国語もちゃんと把握できていないのに、外国語も習うと、両方ともうまく話せなくなると思います。しかも、小学生には勉強は大事だが、遊ぶことも大切ではないんでしょうか。(《11》意見・友だち/上位群/C002)
- (4) ○○君 桜の季節も過ぎた。今年一緒に花見するのはできなかったけど、来年は約束するよ。この二カ月、運動すきのあなたにとってきっと大変だったサークルの皆さんも「○○君がいなくて寂しいな」と言ったり、○○君の分も背おって、頑張っています。○○君の同級生達はもう卒論と就職を準備しはじめるのを聞いて、すこし不安になるんでしょうか。実は、僕にもそのような時がある。それは高校三年生の時、体育の授業でバスケットをやる時、右手が骨折した。最初の二週間、学校

⁵ 左からタスク番号およびタスクの内容・読み手/日本語のレベル(学習者の場合)/J(日本)、K(韓国)・C(中国)番号

へ行けなくなり、家で休養するしかない、毎日同じ姿勢でテレビドラマを見て、時間を潰した。(後略) (《5》 励ましの手紙・後輩／下位群／C008)

表5は各タスクにおいて文体に不自然な使用が見られた人数をレベル別に示したものである。表5を見ると、上位群になるほど不自然な使用が少ないことから日本語が上達するにつれて不自然な使用も減少していくということがわかる。タスク別に見ると、タスク《3》を除けば、タスク《5》や《11》のように読み手が特定で、目下か同等の場合に不自然な使用が多いことがわかる。

表5 不自然な文体の使用人数 (レベル別)

タスク	上位群	中位群	下位群	計	%
《1》 本/上	0	0	1	1	1.7
《2》 本/友	2	1	5	8	13.3
《3》 ポート	2	5	13	20	33.3
《4》 奨/上	0	4	2	6	10.0
《5》 手紙/下	8	8	11	27	45.0
《6》 投書	1	3	6	10	16.7
《7》 観光/上	0	0	2	2	3.3
《8》 携帯/友	1	5	10	16	6.7
《9》 料理	1	3	6	10	16.7
《10》 意見/上	0	4	3	7	11.7
《11》 意見/友	8	5	13	26	43.3
《12》 物語	0	6	5	11	18.3
計	23	44	77	144	20.0

次に、学習者の不自然な文体の使用例を挙げる。例(5)はタスク《5》の中国語母語話者による「励ましの手紙」の例である。二重下線の「過ぎた。」や「時がある」「骨折した」などの「非デスマス体」と、下線部分の「頑張っています」「不安になるんでしょうか」の「デスマス体」が無秩序に混在している⁶。さらに、「非デスマス体」の場合、終助詞や「のだ」を伴わないいわゆる「裸のダ体」を連続して使用していることで後輩に宛てた手紙にも関わらず親しみのある文章とは言えない。例えば、下記の波線の部分を「時があったん

⁶ 「ダ体」の連続使用による学習者の文体の違和感については奥野(2014)でも指摘されており、学習者にとって文体を維持しながらある程度の長さの文章を書くことが容易ではないことは確かである。このような学習者の文体に混用にある規則性が見られるかどうかについてはさらなる検証が必要である。

だ」のように「のだ」を付加すると、優しく語りかけるような親しみが増す。

(5) ○○君

桜の季節も過ぎた。今年一緒に花見するのはできなかったけど、来年は約束するよ。この二カ月、運動すきのあなたにとってきっと大変だったサークルの皆さんも「○○君がいなくて寂しいな」と言ったり、○○君の分も背おって、頑張っています。○○君の同級生達はもう卒論と就職を準備しはじめるのを聞いて、すこし不安になるんじゃないか。実は、僕にもそのような時がある。それは高校三年生の時、体育の授業でバスケットをやる時、右手が骨折した。最初の二週間、学校へ行けなくなり、家で休養するしかない、毎日同じ姿勢でテレビドラマを見て、時間を潰した。「なんで自分がこんな不運なの？」とやまずに考えている。学校の授業はどうするよ、進学相談はどうしよう？こんな、そんな問題は頭から離れない。(後略)《5》
励ましの手紙・後輩／下位群／C008)

さらに表 6 は学習者の不自然な文体の使用の母語別分布を調べた結果である。表 6 を見ると、中国語母語話者の方が韓国語母語話者より多く、ほぼ 3 倍以上の者が文体になんらかの問題を抱えていることがわかる。

表 6 不自然な文体の使用人数 (母語別)

タスク	中国語	韓国語
《1》 本/上	1	0
《2》 本/友	7	1
《3》 レポート	11	9
《4》 奨/上	5	1
《5》 手紙/下	17	10
《6》 投書	9	1
《7》 観光/上	1	1
《8》 携帯/友	13	3
《9》 料理	9	1
《10》 意見/上	6	1
《11》 意見/友	17	9
《12》 物語	10	1
計	106	38
%	29.4	10.6

例（6）と（7）はタスク《3》の韓国語母語話者と中国語母語話者の使用例である。タスク《3》はレポートなので「非デスマス体」で書くべきタスクであるが、例（4）の韓国語母語話者・下位群の場合、「売れました」「下がりました」などと、一貫して「デスマス体」を使用している。

(6) [図1は、A社のデジタルカメラの販売台数についてのグラフである。]（タスク用紙に提示されているレポートの開始部）

A社の場合、初めてのデジタルカメラ【商品名P】が大ヒットし、その年の2004年の販売台数は100千台も売れました。しかし、その次、こうしたヒット商品がなくて2006年まで販売台数が60千台まで下がりました。幸いなことにその2008年までには売り上に変わりがないです。そこで、A社が【商品名Q】を出します。これが今までのデジタルカメラと違い、女性たちにすごく人気を集め、2010年には2004年の【商品名P】ぐらいいまで売れるのです。今後、【商品名Q】は【商品名P】よりもっと売れるのではないかとこの予測も出ています。（《3》レポート・不特定／下位群／K023）

例（7）は同じく中国語母語話者のタスク《3》の不自然な使用例であるが、「非デスマス体」を使用しているが、最後まで維持できず、途中で「減りました」のように、「デスマス体」を使用している。

(7) [図1は、A社のデジタルカメラの販売台数についてのグラフである。]

このグラフはA会社2004年から2010年までの販売数量について表したものである。2004年から2006年までデジタルカメラの販売数は年々に下がり、2004年の100000台から2006年の60000台まで減りました。下がり一方だった。2006年から2008年まで横ばいで増加か減少か見えなかった。ほぼ変わらなかった。2008年から2010年まで販売数量は又伸びつつあっていた。急激に2008年の60000ぐらいいから2010の100000台まで顕著に伸びていたと分かった。（《3》レポート・不特定／下位群／C012）

4. 考察

4-1 書き言葉における読み手と基調文体の選択の関わり

日本語母語話者と学習者の間に、基調文体の選択において差が見られたタスクのうち、読み手が不特定のタスクはタスク《3》「レポート」、タスク《12》「物語」であった。日本語母語話者の場合は基調文体として何を選べばよいのか、共通認識のようなものが存在し

ているため、タスク《3》では「非デスマス体」、タスク《12》では「デスマス体」が選択されていた。特に、タスク《12》の場合は、読み手の小学生を意識して、「デスマス体」が選択されやすかったと思われる。一方、学習者の2割の者は、日本語母語話者とは異なる文体を使用しているが、これは選ぶべき文体を知らないことが理由なのではないかと考えられる。

日本語母語話者より 学習者の方に「デスマス体」の使用が多かったタスク《6》投書の場合、中国語母語話者に「デスマス体」の選択が多く見られた（30名中9名）。これは、中国語母語話者が投書の読み手を新聞社の人に設定し、手紙として書いてしまったことが原因であると考えられる⁷。

また、読み手が特定・同等以下のタスクであるタスク《2》「本の貸し出しの依頼のメール」、タスク《5》「励ましの手紙」については、「デスマス体」の場合は終助詞がなくても問題ないが、「非デスマス体」の場合は終助詞を付加する必要がある、それが学習者にとって難しかったのではないかと考えられる。親しい関係の読み手に対して「非デスマス体」を駆使しながら終助詞を用い、親しみのある文章を書くのは学習者にとって決して容易ではないだろう。読み手が特定のタスク《8》やタスク《11》の場合は、日本語母語話者と同じ文体を選ぶことはできていたが、これらは読み手が同等の他のタスクとは異なり、相手への返信メールを書くというものであったため、相手のメールの文体に合わせていた可能性がある。このような結果から、基調文体の選択には読み手が大きく影響していると考えられ、学習者には読み手が想定できるもの、中でも目上の読み手の場合の方が文体の選択に迷いがなくて済むと思われる。

4-2 学習者の日本語レベルおよび母語と文体の使用との関わり

学習者の場合、読み手が特定で同等以下のタスク（《5》励ましの手紙《11》意見のメール）でも、読み手が不特定のタスク（《3》レポート《12》物語《6》投書《9》料理の紹介文）の場合でも、基調文体に関わらず不自然なものが見られた。例えば、例(8)のように、文末に「終助詞」や「のだ」が付加されない不自然な文体や、例(9)のように、両方の文体が秩序なく現れるものが見られた。

(8) ○○君に

こんにちは、元気？もう2ヶ月くらいたちたなあ。

⁷ (b) ○○新聞社殿

いつも貴社の新聞を拝見させていただいております。この度、私が住んでいる地域にある市民総合病院は経営困難で閉鎖されることについて述べさせていただきたいと思えます。（後略）（《6》投書・不特定／下位群／C008）

あなたが病院に入院したから、もう卒論と就職の時期ね。
あなたも卒論とか就職とか心配だろう？
ぼくも2年前あんたと同じ経験があつてその気持ちちゃんとわかっている。
本当に心配だった。でもね、ぼくはその期間にもっとも大切なものを感じた。
心配してくれる家族もあつたし、友達もあつたし、いままで忘れていたことを振り
返る機会になった。(後略) (《5》励ましの手紙・特定／中位群／K032)

(9) むかしむかし、神さま天帝は一人の美しい娘がいます。

その娘は毎日天国の神さまたちのために服を作ります。

ですから彼女の名前は織女と呼ばれます。

みんなのために毎日服を作って、みんなは彼女のこと、とても好きです。

美しい織女は大きくなって、神さまは織女のために夫を探した。

天国の牛の面倒を見ている牛郎です。(中略)

でも、その日は天国に大雨で、川の水はいっぱいになりました。

「どしよう。牛郎と会えなくなっちゃいますよ。」織女は泣きながらそう話した。

その時、遠いからたくさん「喜鵲」という鳥が来て、川の上に橋になりました。

それで、織女と牛郎はやっと会えました。(《12》物語・不特定／中位群／C010)

これは、読み手が特定で同等以下の場合や不特定の場合においては読み手を意識しながら文体を維持することが容易ではないことを意味している。学習者のレベル別の使用状況を見ると、日本語が上達すれば、正しい文体が選択できるようになるが、日本語学習が進むにつれ文体に対して日本語母語話者と同じような認識を持つようになっていくのではないかと考えられる。また、母語別の使用状況を見た結果、中国語母語話者の方が不自然な文体を多く使用しており、文体の指導に韓国語母語話者より問題を抱えていることがわかった。中国語母語話者は、いずれの基調文体においても「裸のダ体」の使用が文体の不自然さの主な原因となっている。特に、中国語母語話者に対しては、奥野(2014)でも述べられている通り、「ダ体」だけでは親しみを表すことはできず、終助詞を適切に付加するように指導を行う必要があると考えられる。

4-3 今後の作文教育における文体の指導について

「YNU 書き言葉コーパス」の場合、学習者は全員日本に滞在している留学生であるが、日本語母語話者のような共通認識を持つまではかなりの時間や努力が必要であると思われる。実際にはタスクによって日本語母語話者が期待する文体があるはずであるが、まだ明らかにされていない。今後は期待される文体とは何かを詳細に調査し、それを指導に生かす必要があると考えられる。

また、読み手が特定で同等や目下の読み手の場合に、文体の使用に問題が多かったことから、指導の際には読み手を考慮し、さまざまな文体で書くように指示を与え、用途に応じて文体が異なることを意識させる必要があると思われる。

さらに、村岡（1993）でも課題として指摘されている通り⁸、学習者のレベル別・母語別の文体の使用についても追究する必要があると思われる。まず、レベル別の指導に関しては、問題があまり見られない特定・目上から不特定のタスクへ、さらに特定・同等のタスクへと、レベルに合わせ指導する文体を考慮する必要があると思う。母語別の指導に関しては、中国語母語話者には、親しい友人や目下の読み手の場合、親しみのある文体にするためには「非デスマス体」だけでは不自然であり、終助詞や「のだ」を適切に付加しなければならぬことを教える必要があるだろう。

5. まとめ

本研究では、「YNU 書き言葉コーパス」の 1080 編の作文を対象に日本語母語話者と学習者の文体の使用状況を調べた。学習者の場合は、読み手が特定で親疎関係が疎（目上）であるタスクは読み手に対する配慮から文体に注意することができるが、読み手が不特定のタスクや「デスマス体」「非デスマス体」のいずれの文体も使用が可能なタスクでは、文体の使用に問題が見られており、読み手や文体に十分に目を向けていないことが示唆された。以上の結果を踏まえ、今後はさまざまな読み手を対象としたタスクで、メールやレポートなどの伝達媒体にも留意させ、学習者の母語を考慮した作文教育が必要であると考えられる。

付記

本稿は 2014（平成 26）年度第 3 回日本語教育学会研究集会（7 月 5 日、於愛知・愛知大学名古屋キャンパス）における口頭発表内容を中心にして論文に書き改めたものである。

参考文献

- 石黒圭（2006）「日本語学者の文章表現講座 第 5 回 「です・ます形」と「だ・である形」の共存」『本が好き！』November 2006 vol.5 光文社 pp.41-47
- 井上次夫（2008）「論説文に見られる書きことばと話しことばの混用」『全国大学国語教育

⁸ 村岡（1993：59）では「今後日本語教育の現場での扱いを考察対象とする同時に、基礎研究として日本語の文体に関するさまざまなデータが今後さらに必要となるのであろう。それは、日本語教育に関する他の研究と同様、目的別、場面別、レベル別、さらに母語別というように多くの要素を抱えた問題である。」と指摘している。

- 学会発表要旨集』115 pp.95-98
- (2009)「論説文における語の文体の適切性について」『日本語教育』141 pp. 57-6
- (2010a)「コーパスに基づく「語の文体」の明確化」『白鷗大学教育学部論集』4(1) pp.183-201
- (2010b)「単語の文体意識について：話しことばと書きことばの区別」『全国大学国語教育学会発表要旨集』118 pp.129-132
- (2011)「単語の文体判断について—話しことばと書きことば—」『全国大学国語教育学会発表要旨集』121 pp.13-16
- (2012)「単語の文体判断について (2) —話しことばと書きことば—」『全国大学国語教育学会発表要旨集』123 pp. 267-270
- 宇佐美まゆみ (1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662号 pp.27-42
- 奥野由紀子 (2014)「「励まし」の手紙文における文末文体の混用—ダ体の混用に着目して—」『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房
- 金澤裕之編 (2014)『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房
- 熊谷滋子 (2001)「新聞投書による文体の効果—「ですます体」と「非ですます体」の混用を通して—」『人文論集』52-1 静岡大学人文学部 pp.273-285
- 黒木晶子 (2013)「論文における「だ」系と「である」系の形式の混用について」『文教科国文学』55 pp.34-22
- 陳新・川口良 (2013)「中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する一考察」『言語と文化』25 pp. 70-100
- 寺尾綾 (2010)「文末形式の運用とスタイル切り換え--日本語を学ぶ中国語母語話者の縦断データから」『阪大日本語研究』22 pp.113-142
- 中道真木男 (1989)「ケース 17 文体的特徴」『ケーススタディ日本語の語彙』おうふう
- (1989)「ケース 18 語感」『ケーススタディ日本語の語彙』おうふう
- 中村重穂 (2009)「論文に於ける「だ」と「である」の選択条件に関する試行的考察」『北海道大学留学生センター紀要』13 pp.78-97
- (2011)「文体混用に関する一考察 「だ・である」体の「です・ます」体への混用について」『北海道大学留学生センター紀要』15 pp.20-39
- (2012)「文体混用に関する一考察(その2)「です・ます」体の「だ・である」体への混用について」『北海道大学留学生センター紀要』16 pp.71-92
- 野田尚史(1998)「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『國語學』第194集国語学会 pp.89-102
- 福島恵美子 (2007)「デスマス形と非デスマス形との「混用体」に関する考察」『早稲田日本語教育学』1 pp.39-51
- 三牧陽子 (2007)「文体と日本語教育」『日本語教育』138 pp.58-67
- 村岡貴子 (1993)「日本語教育における文体の扱い」『香川大学教育学部研究報告』第1部 88号 pp.43-63

(参考資料)

表 6 と表 7 に YNU 書き言葉コーパスのタスク 1～12 の具体的な内容を金澤編 (2014) から転載し、示しておく。表の番号は便宜上本稿における通し番号となっている。

表7 自発型タスク

読み手		長さA	長さB
特定	疎 (目上)	<p>《1》</p> <p>あなたが借りたいと思っている『環境学入門』という本が図書館ではなく、面識のない田中先生の研究室にあることがわかりました。レポートを書くためにはどうしてもその本が必要です。田中先生にそのことをメールでお願いしてください。</p>	<p>《4》</p> <p>【非母語話者】あなたは大学の留学生会の代表をしています。留学生会の中から、大学側への要望として、留学生向けの奨学金を増やしてほしいという意見が出ています。学長にメールでこれまでの経過を伝え、奨学金増額の必要性について説明し、要望を述べてください。</p> <p>【母語話者】あなたは大学の学生自治会の代表をしています。学生総会で、大学側への要望として、学生向けの奨学金を増やしてほしいという意見が出ています。学長にメールでこれまでの経過を伝え、奨学金増額の必要性について説明し、要望を述べてください。</p>
	親 (同)	<p>《2》</p> <p>あなたが借りたいと思っている『環境学入門』という本が図書館ではなく、仲の良い鈴木さんが持っていることがわかりました。レポートを書くためにはどうしてもその本が必要です。鈴木さんにそのことをメールでお願いしてください。</p>	<p>《5》</p> <p>あなたの後輩は、交通事故に遭いもう2カ月も入院しています。就職活動や卒業論文の時期が近づき、将来に不安を感じているようで、相談に乗ってほしいと頼まれました。実はあなたも後輩と似たような経験をしたことがあります。自分の経験を踏まえ、後輩に励ましの手紙を書いて下さい。</p>
不特定		<p>《3》</p> <p>あなたはデジタルカメラの普及についてのレポートを書きましたが、先生にA社についてのグラフの説明を加えるように言われました。</p> <p>(図)</p> <p>下記の文に続けて、このグラフの内容を説明する文章を書いてください。</p>	<p>《6》</p> <p>経営難のため、あなたの町では、市民総合病院の閉鎖が検討されています。この病院には近隣の町にはない産婦人科、リハビリテーション科があり地域住民への影響が心配されます。現行の診療体制での存続を求め、あなたの意見を新聞に投書してください。</p>

表 8 頼まれ型タスク

読み手		長さA	長さB
特定	疎 (目上)	<p>《7》</p> <p>指導教授の伊藤先生が休暇であなたの国（故郷）を訪問するそうです。お薦めの観光スポットや名物を教えてほしいとメールで頼まれました。詳しく伝えてください</p>	<p>《10》</p> <p>あなたは、英語教育が専門の山下教授から次のようなメールをもらいました。</p> <p>教授「〇〇さん 今早期英語教育に関する意識調査を行っているところです。小学3年生から週2時間英語の授業を行うという計画があります。〇〇さんは早期英語教育に賛成ですか。それはなぜですか。若い人の生の声を聞きたいので、</p> <p>〇〇さんの意見を教えてください。〇月〇日までにお返事ください。よろしくお願ひします。」</p> <p>このメールに対する返事を書いてください。</p>
	親 (同)	<p>《8》</p> <p>友達と以下のケータイメールのやりとりをしました。</p> <p>あなた「ねえ、鈴木先輩が救急車で運ばれた話、知ってる？」</p> <p>友達「へ、うそ、教えて」</p> <p>(★上記はケータイの画面で見せておく。)</p> <p>先日あなたのクラブの先輩がちょっとした事件に遭ったという話を聞きました。(4コマ漫画)。クラブの友達はその話を知りません。4コマ漫画を見て、どんな事件だったか友達に詳細をメールで教えてあげてください。漫画の主人公は鈴木先輩です。</p>	<p>《11》</p> <p>あなたは、仲のよい友達（佐藤さん）から次のようなメールをもらいました。</p> <p>友達「〇〇さん 今、卒論のために早期英語教育に関するアンケート調査をやったんだけど、もっと具体的な意見を聞きたいなと思って...。今さ、小学3年生から週2時間の英語の授業をやるっていう計画があるんだけど、知ってるよね。〇〇さん、早期英語教育に賛成する？それとも反対？理由も教えてくれるかな。〇月〇日までにメールで返事もらえると嬉しいんだけど。よろしくお願ひします。」</p> <p>このメールに対する返事を書いてください。</p>

不 特 定	<p>《9》</p> <p>【非母語話者】あなたは、町の国際交流センターの広報紙で、「国の代表的な料理を紹介する」というコーナーの執筆を依頼されました。あなたの国の代表的な料理を一つ選んで、どんな料理か、どうやって作るのか、どんな時に食べるのか、など詳しく書いてください。</p> <p>【母語話者】あなたは、町の国際交流センターの広報紙で、「日本の代表的な料理を紹介する」というコーナーの執筆を依頼されました。日本の代表的な料理を一つ選んで、どんな料理か、どうやって作るのか、どんな時に食べるのか、など詳しく書いてください。</p>	<p>《12》</p> <p>【非母語話者】あなたは、小学校新聞の昔話コーナーで、あなたの国の昔話を書いてほしいと頼まれました。新聞の発行が7月なので「七夕伝説」のストーリーを書くことにしました。小学生にわかるように、どのような話が詳しく書いてください。</p> <p>【母語話者】あなたは、小学校新聞の昔話コーナーで、今の季節に合う昔話を書いてほしいと頼まれました。新聞の発行が7月なので「七夕伝説」のストーリーを書くことにしました。小学生にわかるように、どのような話が詳しく書いてください。</p> <p>★事前に母語による「七夕伝説」を読ませておく。</p>
-------------	---	--

金澤裕之編（2014）pp.8-11 の転載